

住民主体の通いの場におけるフレイル問診の結果と課題

○本間早姫¹，相馬都¹，成田利恵子¹，五十嵐美由紀¹，柴崎麻実¹，加藤丈夫^{1,2}
加藤裕一¹，山下英俊¹，（1：山形市保健所シンクタンクチーム，2：山形病院）

【背景】山形市では、「住民主体の通いの場」を原則として週1回以上の開催で後期高齢者・要支援者でも行うことができる体操などの活動を行っている団体と定義しており，令和6年8月末時点で104か所の住民主体の通いの場がある．コロナ禍の影響で制限を受けていた通いの場の活動も令和5年度以降，徐々に再開している．通いの場等を通して社会参加することは，高齢者のフレイル予防に関連することがわかっており，通いの場の活動内容の充実がフレイル予防にとって重要である．山形市では，通いの場の立ち上げ支援や継続支援のため，作業療法士が訪問し生活機能，運動機能維持のための講話や実技指導を行っている．今回，通いの場の現状を把握するために作業療法士が収集した情報をもとに分析した．

【目的】作業療法士が収集したフレイル問診の結果をもとに，それぞれの項目の関連性を分析し，今後の高齢者のフレイル予防活動に資することを目的とした．

【対象】活動している通いの場のうち，訪問可能であった通いの場71か所の参加者1,291人中，フレイル問診票に回答した65歳以上835人（回答率64.7%）．

【方法】フレイル問診は，後期高齢者に対する健康診査の場で用いている15項目からなる「後期高齢者の質問票」を用いた．それぞれの項目を単解析（Fisherの正確検定）し，関連する因子を抽出した．関連がみられた因子を統計ソフトR/EZRを用いてロジスティック回帰分析にて解析した．統計的有意水準は5%未満とした．

【結果】単解析の結果から，口腔機能の低下については，運動機能のわるさ，認知機能のわるさ，健康状態のわるさ，体重減少，社会参加の低さに関連がみられた．山形市民の健康寿命を阻害する要因の1つである認知症と関連する口腔機能に着目し，ロジスティック回帰分析した結果，有意差をもって影響する項目は運動機能のわるさ，認知機能のわるさ，体重減少であった（表1）．

表1. 口腔機能に影響する因子

	オッズ比 (95%CI)	P 値
健康状態	1.28 (0.81 - 2.04)	n. s.
体重減少	1.60 (1.02 - 2.50)	<0.05
運動機能	1.92 (1.40 - 2.67)	<0.001
認知機能	1.57 (1.16 - 2.11)	<0.01
社会参加	1.54 (0.73 - 3.24)	n. s.

(n. s. : not significant)

【考察】口腔機能は，運動機能，認知機能と相互に関連しあっていることが考えられ，3つ全ての機能に働きかける活動を実施することが望ましいが，まずは1つでも活動を実施することが重要であると考えられる．運動に限らず，口腔機能や認知機能などの分野の活動もフレイル予防に効果的であることを周知し，誰でも通えるように通いの場のあり方について検討する必要があると考える．

▶R 6 年度

第 51 回山形県公衆衛生学会発表(フレイル・社会参加に関すること)のまとめ

テーマ	住民主体の通いの場におけるフレイル問診の結果と課題
内容	通いの場の立ち上げ支援や継続支援のため、作業療法士が訪問し生活機能、運動機能維持のための講話や実技指導を行っている。通いの場の現状を把握するために作業療法士が収集したフレイル問診の結果をもとに、山形市民の健康寿命を阻害する要因の 1 つである認知症と関連する口腔機能に着目し、今後の高齢者のフレイル予防活動に資することを目的に、通いの場 71 か所の参加者 1,291 人中、フレイル問診票に回答した 65 歳以上 835 人を検証対象とし、口腔機能に影響する因子について分析した。
結果	分析結果から、口腔機能の低下に影響する項目は、運動機能のわるさ、認知機能のわるさ、健康状態のわるさ、体重減少、社会参加の低さであった。 口腔機能は、運動機能、認知機能を相互に関連しあっていることが考えられ、3 つの全ての機能に働きかける活動を実施することが望ましく、運動に限らず、口腔機能や認知機能などの分野の活動もフレイル予防に効果的であることから、通いの場のあり方について検討する必要があると考えられる。

《分析結果の詳細》

- ・山形市民の健康寿命を阻害する要因の 1 つである認知症と関連する口腔機能に影響する因子は、運動機能、認知機能、体重減少であることがわかった。